

二〇一三年八月二〇日(参加者一四名)

翻る葉裏にちらと葛の花	わかば
四阿に憩へば通ふ秋の風	"
秋の雲白し六甲際やかに	"
千羽鶴涼し戦争記念館	満天
洞ろなる埴輪のまなこ秋思あり	"
身に入むや千人針の斯く古りて	"
澄む水に魚影日の斑をまき散らし	宏虎
と見る間に霧に失せたる千枚田	"
浮かみ出し五重塔や万灯会	ぼんこ
墓洗ふ土に沁みこむ閼伽の水	"
蒲の穂の風にうながされて揺るる	せいじ
紅蓮の炎のごとく立ちにけり	"
身に入むや慰問袋の旭日旗	菜々
千羽鶴古りて秋思や遺品展	"
林立のラスト眩しき晩夏光	ひかり
秋水の魚影のスクランブルを見よ	つくし
下校子のカバンが並ぶ葛の土手	有香
鐘連打して始まりし盆写経	小袖

声はずむリユックの親子風の盆	こすもす
夾竹桃戦争資料館の窓	きづな
内海の風に傾くヨットかな	はく子
上がり根をベンチとしたる樹下涼し	"
身に入むや展示の慰問袋古り	"

定例会の選

二〇一三年八月二〇日(参加者一四名)